にすることと今後は Hb A_1 がその管理に有用であることが示唆された。

35. 各種肺疾患における経気管支肺生検（TBLB）の有用性

山口　一，斎藤陽久，鈴木良一
中村和之　（旭中央）

呼吸器疾患の診断に肺の組織学的所見の必要なことは言うまでもない。当院にても50例に気管支鏡による鉗子生検を施行した。その診断率は間質性疾患で84%，閉塞性疾患で82%，感染性疾患で80%，腫瘍性疾患で75%，総合的に82%であった。また合併症としては気胸，出血が4例（8%）であった。経気管支肺生検は侵襲が少なく安全であり，適応範囲も広く，また診断率も高く今後，肺生検の第一選択になると考えられた。

36. 血漿交換療法が奏効した重症筋無力症の1例

斉藤陽久，伊良部徳次，大谷　彰
諸橋芳夫　（旭中央）

重症筋無力症クリーゼの治療に血漿交換療法を施行し，著効を得た。抗 Ach-R 抗体の有意な変動も認められた。血漿交換療法は，従来の治療と共に，重症筋無力症の治療に早期に導入すべき治療法と考えられた。また，自己抗体等が血中異常増加する各種自己免疫疾患の治療法としても注目されるべき手段と考えられた。

37. MCTD におけるステロイド隔日投与例

斉藤博幸，小方信二，三宅一郎
（成田赤十字）
鏡味　勝　（千大）

レイノー症状，発熱，皮フ紅斑，手指ソーセージ様腫脹，間質性肺炎等を認めた38歳女性。更に筋逸脱酵素上昇，筋生検より多発性筋炎をも思わせ，RNP 抗体陽性，Sm 抗体陰性，抗 DNA 抗体陰性等により MCTD と診断。プレドニン60mg 隔日投与し，臨床症状の消失を見，入院当初の肺レ線の間質性変化，拘束性パターンの著明な改善を見，更に PSP の改善も認められた。治療経過中，臨床上特に副作用を認めなかった。

38. 乳糜胸を伴った悪性リンパ腫の1例

柏戸　正英，海宝豊徳，山口康一郎
高砂子通子，蒔田順子，善利　武臣
（柏戸病院）

胸水貯留による呼吸困難を訴えた65歳の男性。うっ血性心不全，結核性胸膜炎を疑ったが，コルチコステロイドに反応して胸水減量した。赤沈値促進，IgG 高値を示した。本年11月中旬より乳糜胸出現，呼吸困難いちじるしく再入院した。表在性リンパ節腫大なく，胃，腸・胆嚢・肝などに悪性腫瘍を認めない。下肢からのリンパ管造影により，左後腹膜リンパ節腫を認め，そのX線所見より，転移癌を否定し，悪性リンパ腫と診断した。胸部 CT スキャン上，右胸腔に液体貯留いちじるしく，右肺を圧排，後縦隔洞の胸管破裂部よりの造影剤流出所見を得た。

乳糜胸発症までの1年間，胸水貯留をくり返し，皮膚生検，耳下腺，顎下腺造影，CT 所見から Sjögren 症候群が疑われ，さらに，肥満，皮下脂肪沈着，皮下脂肪腫の存在から，全身性脂肪代謝障害の部分症状とも考えられた乳糜胸の1症例を報告した。

39. 慢性甲状腺炎の経過中に，脾梗塞にて発症した，Sjögren's synd., SLE の合併例

五十嵐忠彦，岩間章介，加藤繁夫
木内夏生　（千葉労災）
末石　真　（千大）

症例，32歳女性。半年前に慢性甲状腺炎と診断され加療中，多発性漿膜炎・脾梗塞・Focal G.N.（IF にて C3，F，M陽性）にて発症した SEL・Sjögren's synd の合併例。特に脾梗塞は超音波エコー・CT scan により確認しえ，原因として，血中免疫複合体高値・抗 DNA 抗体高値，補体低値より SLE に伴なう壊死性血管炎が疑われた。しかし血管炎として他臓器障害は認めなかった。プレドニゾロン60mg にて治療開始し，脾腫の縮少・全身状態の改善をみ，経過観察中である。

40. Autoimmune thyroiditis における腎糸球体病変

田原和夫，斉藤正明，蓮沼桂司
渡辺幹夫，館野純生，鈴木直人
浜崎智仁，宍戸英雄，磯田和雄
（国立佐倉）
浜口欣一　（同・病理）

最近国外で甲状腺組織抗原による免疫複合体腎炎が5

症例報告され，我々も Autoimmune thyroiditis に腎障害を伴った2症例を検討した。2症例もと螢光抗体間接法では腎糸球体に Thyroglobulin の特異螢光は認められなかったが，血中の甲状腺自己抗体が高値で，1症例においては血中免疫複合体も高値であり，2症例とも蛋白尿，血尿を呈し，腎糸球体末梢係蹄壁に免疫複合体の沈着が証明され，甲状腺組織抗原による免疫複合体腎炎が強く示唆された。

41. 当院におけるループス腎炎の検討

住田孝之，伊良部徳次，吉田象二
大谷　彰，諸橋　芳夫　（旭中央）

腎生検を施行したループス腎炎23名について WHO 光顕分類と腎機能，尿蛋白量，各抗体，補体との関係を検討した。また，腎病変を半定量的に評価する pathological score（以下 PS）を考案し検討した。結論①膜性腎炎，中等度以上のびまん性増殖性腎炎に尿蛋白量の増加，腎機能の低下を認めた。②抗 RNP 抗体，抗 DNA 抗体と腎機能，尿蛋白量とは相関しなかった。③PS と腎機能は相関がみられたが，尿蛋白量とは相関を認めなかった。

42. 高年齢に見られた汎下垂体機能低下症の1症例

蓮沼桂司，斉藤正明，田原和夫
渡辺幹夫，館野純生，鈴木直人
浜崎智仁，宍戸英雄，磯田和夫
（国立佐倉）
三上恵只　（千大）

症例，63歳の女性で，全身倦怠感，食欲不振を主訴として来院。現病歴：40歳で第5子出産時，大出血があり，42歳で月経閉止。以後，恥毛脱落，全身倦怠感，貧血などの症状が出現した。現症：動作緩慢，無気力，低血圧，皮膚乾燥，頭髪はやや赤い。眼瞼結膜は蒼白で，眉毛，腋毛，恥毛の脱落を認めた。検査所見で，貧血，低血糖，低 Na 血症があり，内分泌学的検査より sheehan 症候群を疑い，下垂体前葉ホルモン刺激試験を行なった。ACTH，GH は無反応，その他のホルモンも低反応で，汎下垂体機能低下症と診断した。

43. 糖尿病合併末端肥大症の1例

林　良明，波多野　等，永井　順
（沼津市立）

症例，38歳男。昭和56年8月全身倦怠感，口渇訴え入院。身長166cm，体重68kg，末端肥大症様顔貌。頭部 CT で下垂体腫瘍判明。GH 85ng/ml，GH 刺激試験で TRH 反応型，CB-154にて GH 抑制あり，他の pituitary hormone 正常。50g OGTT で前血糖307，30分455，2 hrs 396mg/dl，IRI は全て5 μU/ml 以下。Acromegaly の low insulin D.M は GH に対する膵 β 細胞の不応性に因るとする Luft 説を術後の耐糖能検査で追試予定。

44. 甲状腺及び卵巣機能異常を伴った Addison 病の1例

日野　真一，浅子由己，上野正和
五十嵐正彦，隆　元英（国立習志野）

症例は34歳女性。昭和47年全身倦怠，頭痛にて発症。その後皮膚，粘膜色素沈着，無月経等多彩な症状を認め，昭和56年8月入院。内分泌学的検索にて，甲状腺機能異常及び原発性卵巣機能不全を伴った Addison 病と診断されたが，病因については，確定するには至らなかった。

45. 異所性 ACTH 症候群
—COMP 療法をみた1例について—

後藤孝史，斉藤　博幸，小方信二
安　徳純，吉田勢津子，吉田　恒
森　　上，松本一暁（成田赤十字）

既に多発性骨転移の疑れる肺小細胞未分化癌の患者が著明な低K低 Cl 血症を呈していた（Na，Ca は正常である）。血中 ACTH は＞500pg/ml，アルドステロンは141.0pg/ml と著増を示し，異所性 ACTH 症候群と診断された。COMP 療法を試みるとレ線上の改善と共に，ACTH は 91pg/ml，アルドステロンは 55pg/ml へと正常範囲内に減少した。Kは開始直後より1過性の上昇をみている。以上，腫瘍マーカーとしてのホルモン値を，治療のモニターとしえた1例である。

46. Aldosteron 症における高血圧と R-A-A（Renin-Angiotensin-Aldosteron）系

47. 境界型および持続型本態性高血圧患者における交感神経系，レニン・アンジオテンシン・アルドステロン系の相関について

三上　恵只（千大）

51名の本態性高血圧患者を，境界型と持続型に分け，